

名詞述語文における「ほぼほぼ」の用法の傾向

近藤優美子^{こんどう ゆみこ} (大阪大学大学院生)

本発表では、「ほぼほぼ」と「ほぼ」それぞれの名詞述語文での用法の使用傾向を明らかにする。本発表の対象範囲では、「ほぼほぼ」と「ほぼ」は言い換え可能であり、用法は共通の基準で近似用法と蓋然性用法に分けられる。コーパスの用例を分類した結果、「ほぼほぼ」は「ほぼ」よりも蓋然性用法で積極的に使用される傾向があることが明らかになった。

1. 先行研究

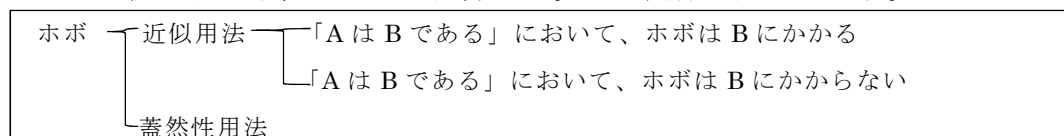
森田(1989)、飛田・浅田(1995)は、「ほぼ」の用法を被修飾語の性質に注目して分類している¹が、これらはすべて本発表でいう近似用法に当たる。仁田(2002)は「ほぼ」は事態成立の完全度・近似度を表す用法と、それを通して事態成立の蓋然性へと近づいた用法を持つとしている。本発表では蓋然性用法は近似用法と区別して定義できるものとする。

2. 使用データ

検索系「梵天」に格納された『国語研日本語ウェブコーパス』²を利用して用例を抽出した後、手作業で確認した名詞述語文³「ほぼほぼ」241例、「ほぼ」493例を使用する。

3. 用法

本発表で扱う用例では、「ほぼほぼ」と「ほぼ」の用法とその分類基準は共通であるため、以下双方を指す場合は「ホボ」と記す。本発表ではホボを近似用法と蓋然性用法に区分し、さらに近似用法は下位で2つに区分した。この関係を図1に示す。



【図1】ホボの用法の関係

近似用法は、ホボがかかる語が表す属性・状態が完全ではないが、完全に近似していることを表す。近似用法の下位区分1つ目は「AはホボBである」において、Aは完全にはBではないがBに近似することを表す。つまり、ホボは後のBにかかる。例を(1)に示す。

(1) カッペリーニはほぼほぼ／ほぼ素麺です

(1)は非常に細いパスタであるカッペリーニは素麺ではないが、素麺に近いものであることを表している。近似用法の下位区分2つ目は、「AはホボBである」において、Aの全

¹ 森田は 1)数量 2)状態 3)行為の結果 4)行為の進行状況に分類し、飛田・浅田は 1)近似している様子 2)完全に近い状態に行われる様子を表す、と分類している。

² ウェブ上の日本語テキスト 100億語規模のコーパスで、データ収集は2014年10月から12月に行われている。

³ 品詞列検索を利用し、ほぼほぼは「表層形:ほぼ+表層形:ほぼ+品詞:名詞」で検索(1,001例)、ほぼは「表層形:ほぼ+品詞:名詞+品詞:助動詞」で検索した(1,316例)。その後一例ずつ確認して、名詞述語文(従属節を含む。「ほぼほぼ」の名詞的な用法は対象としない)を抜き出し、リンク切れで必要な文脈が確認できないものを除去した。

てではないが、全てに近い部分が B であることを表す。ホボと B の間に「全て」を補うことができ、意味的にはこの「全て」にホボがかり、B にかかるのではない。また、A は「A の全て」と言いうる範囲性を持つ語である必要がある。例を(2)に示す。

(2) お客さんは**ほぼほぼ**／**ほぼ**男性です

(2)は、客の全てではないが全てに近い部分が男性であることを表している⁴。

蓋然性用法は、未確定の事態について「A は B である」蓋然性が高いことを表す。(3)では、まだ確定ではないものの、胎児は女の子である蓋然性が高いことを表している。

(3) お腹のお子さんは**ほぼほぼ**／**ほぼ**女の子です

4. 「ほぼほぼ」と「ほぼ」の用法の傾向

2章で示した用例を、3章で示した用法とその下位区分に分類した。結果を表1に示す。

【表1】「ほぼほぼ」と「ほぼ」の近似用法と蓋然性用法の用例数

ほぼほぼ	近似用法 229 例(95.0%)		蓋然性用法
全 241 例	ホボが B にかかる 183 例(75.9%)	ホボが B にかからない 46 例(19.1%)	12 例(5.0%)
ほぼ	近似用法 485 例(98.4%)		蓋然性用法
全 493 例	ホボが B にかかる 437 例(88.6%)	ホボが B にかからない 48 例(9.7%)	8 例(1.6%)

この結果から、次の2つのことがわかる。1)「ほぼほぼ」は「ほぼ」よりも、蓋然性用法の用例が占める割合が大きい。2)近似用法において、「ほぼほぼ」は「ほぼ」よりも、ホボの後に「全て」を補うことができ、ホボが意味的に B にかかるのではない用例が占める割合が大きい。この2点について X^2 検定で検定した結果、有意差が認められた。1)は($X^2(1)=5.672$, $p<.05$)、2)は ($X^2(1)=13.253$, $p<.01$)である。

5. まとめと今後の課題

本発表では、名詞述語文において「ほぼほぼ」と「ほぼ」の用法の使用傾向には2つの点で有意な差があることを明らかにした。1つ目は、「ほぼほぼ」は「ほぼ」よりも蓋然性用法で使われる用例の割合が多いこと、2つ目は、近似用法の下位において「ほぼほぼ」は「ほぼ」よりも、ホボが B にかからない用例の割合が多いことである。

だが、この2つの傾向が生じる理由と、この2つの傾向がどのように関係するのかについての説明はされていない。これを説明することを今後の課題としたい。

参考文献

仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版。

飛田良文・浅田秀子 (1995) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版。

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店。

関連 URL

『国語研日本語ウェブコーパス』 検索系 『梵天』 <http://bonten.ninjal.ac.jp/>

⁴ 「お客さんは**ほぼほぼ**／**ほぼ**全て男性です」のように(2)に「全て」がついた用例の場合には、ホボは後ろにある B にかかると言え、(1)と同じ区分になる。だが、今回対象とした用例 734 例にはこのような用例は存在しなかった。